

越中一宮



第50号

越中高瀬神社
一宮

平成 28 年 7 月 1 日

<http://www.takase.or.jp/>

撮影：南部スタジオ

社頭講話

「節目」

宮司 藤井秀弘

日本列島には「春夏秋冬」季節の変わり目が毎年必ずやってきます。

私達の祖先は、それを敏感に捉え、季節の「節目」を定めて、その都度、行事を行ってきました。

一月七日の「人日」に始まり、三月三日の桃の節句である「上巳」、五月五日の「端午」、七月七日の「七夕」、九月九日の「重陽」の五節句のことです。この節句の日には、儀式が行われ、その際に神様に供えられたものを「節供」と呼んだことが「節句」という言葉の始まりだそうです。

「人日」は、古代中国の正月七日に「人」（六日までは家畜）の吉凶を占う風習が移入されたもので、七日には邪気を祓うために、七草の入った粥を食べ、一年の無病息災を祈ったといわれています。これが後に「七草がゆ」となりました。平安時代は宮中の儀式でしたが、江戸時代には一般に定着し、幕府の公式行事となりました。

また、「上巳」は、中国の上巳節が起源で、三月上旬の巳の日という意味です。この日に、川で身を清め、不浄を祓った後に宴を催

す習慣がありました。これも平安時代、日本に伝わり、宮中の「人形遊び」と結びつき、「流し雛」へと発展したようです。現在の形式の雛祭の風習は、江戸時代からといわれています。

さらに「端午の節句」。本来、端午とは五月初の午の日を指しますが、現在は五月五日に定着しました。

古代中国では、この日を葉採りの日として、葉草を摘んで野遊びをしました。また、五月は悪月、物忌みの月とされ、その邪気を祓うために蓬で人形をつくって家の戸口に吊るしたり、粽を食べたり、菖蒲を浸した酒を飲んだりして邪気を祓う行事をしました。菖蒲は昔から薬草として使われていたそうで、男の子の節句とされるまでは、厄病を祓う節句で「菖蒲の節句」とも呼ばれており、平安時代は宮中の儀式でした。江戸時代になって、三月三日の女子の節句と対応させて、菖蒲が尚武と同じ音であることから男子の節句になり、幕府の公式行事となりました。

「七夕」は、七月七日（八月七

日に行く所もあります）。中国に古くから伝わる、牽牛星、織女星の伝説に基づいた星祭りの説話と日本古来の農耕儀礼や祖霊信仰と結びついたといわれており、七夕祭ともいいます。現在は七日の夜の行事になっていますが、本来は六日の夜に、短冊をつけた笹竹を軒下に飾り、七日の朝に川に流します（最近は流せません）。願い事を短冊に書いて笹竹に吊るす風習がありますが、これは、中国の乞巧奠（竹竿に糸をかけて裁縫や習字の上達を星に祈る習わし）からきているようです。

九月九日は「重陽」の節句。菊の節句、九月節句ともいわれました。重陽は易でいう陽数の極である九が重なることから重九ともいったようで、昔中国では奇数である九が重なるこの日は大変めでたい日とされ、菊の香りを移した菊酒を飲み、邪気を払い、長命を願うという風習がありました。日本には平安時代の初めに伝わり、宮中では観菊の宴（重陽の宴）が催され、群臣に詩歌をつくらせました。菊の節句、菊の宴ともいわれています。

このように中国の暦法と日本の風土や農耕を行う生活の風習が合体して宮中行事となったものが「節句」の始まりとされています。

す。私たちの祖先が持っていた季節に對する鋭い感覚が外来のものを日本人に適した形式に整えて、更に発展させてきたことに感心します。

しかし、最近心配になるのは、世の中があまりにも進歩しすぎて、自然の移り変りを一つ一つの節目として感じなくなってきたように思えるのです。自然の姿から感じるという感覚が薄れ、季節感のない、いわば不自然な感覚に慣れてきてしまっているということです。何かしらけじめのない、社会現象が次々に起こっています。節目ということが疎かにされている感じがします。

昨年、終戦七十周年の節目と大騒ぎしていましたが、その後の日々の社会に特別な変化はあったのでしょうか。

何かの節目を迎えるたびに国内が安定し、国民生活も充実して行く、その様な意義のある節目を迎えなければならぬと思います。

この社報もおかげさまで第五十号発行の節目を迎えました。社頭講話として諸々書かせていただきました。この節目を契機として、より多くの皆様に喜ばれる社報となるように、高瀬神社らしい紙面づくりに努力して参ります。今後とも宜しくお願い致します。

祭事暦

春季祭(大祭)

四月十日午前十時より満開の桜が咲き誇るなか「春季祭」を肅行しました。神社役員・氏子・農協関係者、約三十名が参列され、今年一年の平安と豊作を祈りました。

祭儀では宮司祝詞奏上に続き、神楽「浦安の舞」が奏され、参列者全員で「越中一宮高瀬神社奉賛歌」を奉唱しました。

祈年穀祭(大祭)

六月十日午前十時より「祈年穀祭」が肅行されました。

祈年穀祭は、農作物が虫害の影響なく豊作になるよう祈念するお祭りです。

起源は、飛鳥時代に遡ります。当時、深刻な病虫害が猛威を振るっていた為、天武天皇は勅使を遣わされ、事態の収束と豊作を祈願されたことが始まりとされています。

神輿巡渡御行程

なんと農業協同組合



↓ 福光農業協同組合



↓ いなば農業協同組合



↓ となみ野農業協同組合



御神前で御神火が灯され、宮司の祝詞奏上に続き、大前に砺波地区農業協同組合協議会から



の幣帛が供えられ、参向使を務めるとなみ野農業協同組合専務理事 小橋 昭夫 氏による祭文が奏上されました。
本殿での祭典に続いて、奉仕員・参列者全員が境内大鳥居前に整列し、御神前で点火された忌火が宮司から参向使に手渡され、鳥居前に備えられた「かがり火」に点火し、農業の無事を祈り、拝礼しました。
同月十三日には、何十年振りの雨のなか、神輿が砺波地区の各農業協同組合本店を巡行しました。各農協において組合長以下職員総出で神輿を迎え、本年の五穀豊穡を祈念致しました。



献穀田だより

「御田植祭」齋行



奉耕者

谷川為晴氏

井波地域中核農業士協議会(柴田嘉久会長)

五月二十二日、南砺市沖の献穀田で「御田植祭」が齋行されました。

大勢の関係者が見守る中、早乙女姿の女子中学生五名が、谷川為晴氏より「コシヒカリ」の苗を受け取り、心を込め丁寧に植えました。

九月中旬には「拔穂祭」を行い、収穫した稲は「懸税」として伊勢の神宮に奉納されます。



早乙女奉仕者

- 箭原 希美さん (中学生)
- 直江 麻美さん (中学生)
- 森 柚葉さん (中学生)
- 横江 咲希さん (中学生)
- 亀田 侑佳さん (中学生)

金婚祭

四月八日午前十時より、「金婚祭」が齋行されました。祭典前には、高瀬地区老人クラブ連合会(藤井正雄会長)の会員による清掃奉仕により、境内が掃き清められました。その後、祭典では、宮司祝詞奏上に続き、神楽舞「吾妻」が奉奏され、再びめぐり来た春と会員の健康長寿を祝いました。



金婚者

- 南砺市高瀬 大和彌壽夫 泰子 御夫妻 (千歳会)
- 南砺市高瀬 傍田 昭治 紀子 御夫妻 (千歳会)
- 富賀見 明 小夜子 御夫妻 (保寿会)
- 南砺市北市 玉井 紀一 澄子 御夫妻 (静寿会)

新しいお守りの ご案内

「四季の肌守」

ご祈禱を受けられた方に授与しております「肌守」を新調し、本年七月一日より、「四季の肌守」を授与致します。

今までは一年を通して同じ肌守を授与しておりましたが、ご参拝の方からのご希望もあり、春夏秋冬のそれぞれの色・花を描いたお守りにしました。

○春の肌守

・授与期間

三月一日～五月末日
日本を代表する春の花「桜」の模様が施されています。



○夏の肌守

・授与期間

六月一日～八月末日
涼しさを感じさせる水色に、朝顔が施されています。



○秋の肌守

・授与期間

九月一日～十一月末日
肌色の生地に、秋を代表する花菊が詠えてあります。



○冬の肌守

・授与期間

十二月一日～二月末日
雪の色である白を基調として、南天が添えられています。



「交通安全ステッカー 御守り」

「交通安全ステッカーお守り」を新色にして今年度より授与しております。

これまでは交通安全のご祈禱の方のみ授与しておりましたが、参拝者の要望が多くなり、改めたので改めて授与することになりました。



「勝守」

「勝守」が新しい模様になりました。黒地に紫の菊の花が施されています。



団体参拝の ご案内

古来より人と人、心と心を結ぶ福の神・結びの神様であります「大國主命(大國様)」をおまつりする当社では、会社の参拝(安全祈願・創業記念日)、必勝祈願、同窓会記念参拝等の各種祈願を受け付けております。

お問い合わせは社務所へお願いします。
電話〇七六三(八二)〇九三二



宝物殿開館



宝物殿（表紙写真）をリニューアルオープンしました。宝物殿は、当社功靈殿奉斎会初代会長であり、当地の名士でありました岩川毅氏により、昭和五十九年に寄進されました。

内装工事・展示品の陳列作業が終わり、六月十八日より公開しました。前号にてご紹介した神宮の御装束神宝をはじめ、刀剣類等、今まで公開されていなかった宝物も展示しています。お参りの際は、ご拝観下さい。

開館日時

不定期の為、事前に社務所までお問い合わせ下さい。

拝観料 無料

宝物紹介

松平津由遺墨



松平露は、鳥取西館新田五代藩主で「文学三侯」と称された池田常定（松平冠山）の末娘（十六女）です。露姫は、利発で信仰心も厚く周囲から愛されていました。が、疱瘡で数え六歳にして亡くなります。死後、父母らに宛てた遺墨が

見つかり、父の冠山は、菩提を弔う為、その遺墨を全国の社寺・知人・友人に送り追悼文や詩歌を求めました。当神社の展示品もその内の一つになります。遺墨に認められた露姫の周りの人を思いやる内容は大勢の人を感動させ、老中松平定信から市井の人まで一六〇〇余点の追悼がよせられました。

松平冠山 奉額



遺墨とともに神社に奉納された額。文政八年（一八二五）に送られたもので、正面に「越中国一宮 正一位勲一等高瀬神社」と記されている。

御物石器

縄文時代（約三千年前）
南砺市指定文化財

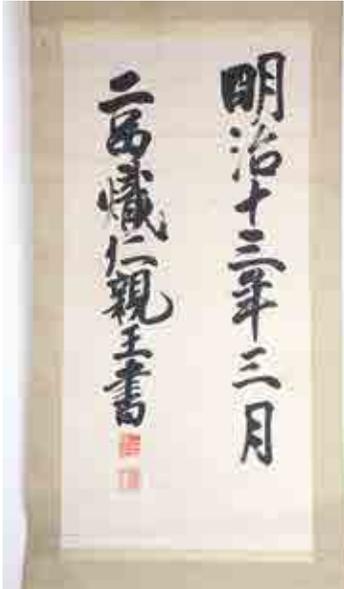


御物石器という名称は、石川県比良遺跡から出土した石器が、明治天皇が北陸東海を巡幸された際（明治十一年）に献上されたことに始まります。明治時代に「御物となった石器」と札が付けられて展示されたことから、この名前が学術名称として今日まで用いられてきました。

た。縄文時代の終わり頃に作られたと考えられ、岐阜県飛騨地方から北陸地方にかけて多く出土しています。形状から実用品ではなく、縄文時代の人々の呪術的な道具だったと考えられています。

有栖川宮熾仁親王題字

有栖川宮熾仁親王（天保六～明治二十八年）は、皇典講究所総裁でありました有栖川宮熾仁親王の第一王子で、江戸から明治の激動の時代に掛けて東征大総督や参謀総長、神宮祭主を歴任された人物です。揮毫された社号は、拝殿、大鳥居に掲げられています。



南砺市埋蔵文化財センターにて 高瀬神社宝物展開催中

南砺市埋蔵文化財センターにて「越中一宮 高瀬神社 宝物展」が平成二十八年九月三十日まで開催されています。国政や日中友好に尽力された松村謙三の遺品や、縄文時代の石器類、刀剣などの宝物をご覧になることができます。



高瀬村と加越線(二)

元加越能鉄道社員

岩倉善三

昭和二十五年六月に加越線子会社化についての説明会が加越線営業所にて開かれまして。私は話を聞く内に意見を求められ『今日迄の私の夢と希望は、富山県一市街地化(全県下を一つの都市のように一体化する)を称え、今日迄努力された佐伯宗義先生が目標でした。先生が今日迄称え、県民の皆様にご約されたことはどうなったのでしょうか。私は亡き塚本佐一郎前所長より預かった金沢迄の鉄道計画路線図を持っています。この計画の実現はどうなりますか。私は子会社分割に反対です』と一部の青計画図を出しました。佐伯社長は返答に窮して居られました。翌日、加越線の所長に呼ばれ、金沢

迄の計画路線図は没収され、今後、発言に注意するように言われました。私は非常に落胆し、一週間の休暇願を出し、加越線に見切をつけ、東京都日野市にありました日野自動車に採用して戴くようお願いに上りました。日野社員寮に一泊していると、地鉄本社に呼出され、舟木常務、清水部長立合の上、私に次のように言われました。『君の事は石黒さんからも聞いています。君の意見は間違っていないでしょう。今後、何かがあれば私なり清水さんがあなたを守ります。どうか安心して、今まで通り加越線を守って下さい。今後も努力して下さい』と言われました。

このときの約束どおり私は、四十二年間会社勤務中守られました。清水さんは早くお亡くなりましたが、舟木さんは最後まで私を守って下さい

ました。

舟木さんは高岡市木舟町の出身であり、私の恩師の石黒先生と東大の同級生で、加越線については私と同意見であり、呉西に非常に感心のある方でした。後に加越線廃線を指示された時も、私は沼田益太郎さんとワンマンカーで運行する計画を作製し、それを名古屋陸運局へ提出しまし

た。大変でしたが、このときも舟木さんに守って戴きました。

昭和二十七年年度に内燃機関車となり、殆ど蒸気機関車は使わなくなり、ディーゼルエンジンも安定しました。年度毎の整備計画、改良計画も立て易くなり、予算も或る程度、賃上げ以外は作成しやすくなりました。年間を通じ、お金のかかる事は車検整備、ディーゼル機関のオーバーホール、車輛の運転操作の改良、冬期車輛の暖房等の費用でした。車輛の車検は現在の自動車と同じように、二年に一回行われ、動力伝達部、制動部、走行装置、ドアの開閉等が正確に出来るか、検査されました。これは日本国有鉄道が基本となり、当時の運輸省が管理し、各車輛を元帳に記録し、車検車輛のデータを報告する義務があり、民間鉄



さよなら加越線(昭和47年9月15日)

道は附近の国鉄工場、若くは車輛会社にお願ひしました。特に電車と違い、内燃動車は運転動作が複雑で値段も割高とあり、どの会社も喜びませんでした。しかし、昭和二十年〜三十年初めまでは、会社の収益も良いので、国鉄松任工場や、後半は川田工業に持込み一ヶ月余りも休車し、車検を行いました。

昭和三十年後半になると加越線は自家用車とバスの進展により、徐々に利用者が少なくななり、収益が下がって来ました。この頃、前半にお話した大阪汽車会社の阪野幸太郎さんが、自分で阪野工業所を創設し、日本車輛、汽車会社、国鉄職員の技術者（定年退職者）数十名を再雇用し、日本各地の中小私鉄の電車や内燃動車の車検・修理に力を入れたのを聞き、お手紙を出して来て戴きました。現

地で車輛の見積を戴き、図面や書類一式は当社で行うという事で、当時の時価の約半額で、尚、車は現地の青島町、駅横の以前の木炭倉庫を整理し、休車日数も二〇日程度で仕上げました。会社は非常に喜んで、この後の車検での改良や、修理等私に一任して戴きました。

また、今まで内燃機関のオーバホールも平均走行距離



約六万kmでしたが、アメリカ空軍使用のエンジンオイル、バーダルを使用する事により三倍の十八万km迄連続使用可能になり、エンジンオイルの使用原価も約二割増で済みました。阪野さんは阪野工業の社員を大切にされ、各自の自主性を尊重して、殆んど何も申されませんでした。社員は非常に真面目な方々ばかりで、私は深く感心させられました。

青島町の民家に一人一間を借りて、三軒の家に分れて住んでおられました。食事付でしたが、前金で支払いされるので、民家の方には非常に喜んで戴きました。また台車の磨耗取替部品等は、総て私が図面なり寸法を書き、庄川町の太田鉄工所で作って戴きました。鉄工所も大変喜んで、同一の家族のようになりました。

昭和三十二年に東急車両製造のキハ一二五、一二六号車の新車二両が入りました。総括制御方式の入庫に伴い、従来の車輛も同一方式に改良を進めることになり、当時主力のキハ一一〇五二、キハ一一〇五三号車も改良工事計画を立て、通常の会社の六割程の工事費で着手することが出来ました。また車内暖房も一部温気暖房、一部排気暖房方式に改良し、経費の節約に努めました。

乗務員、特に運転手は一両一名から二両でも三両でも一名という方式に順次変り、一方、駅の方々も切符の販売が、自動販売機となり主要駅以外は駅員が少なくなり、人員も大幅に縮小されました。しかし情勢は一層深刻となり、昭和四十五年前半からいろんな噂が飛びました。それは最も恐れていた加越線廃止

高瀬神社駅跡



な点でした。

昼は加越線の合理化に、夜は町内会、土地改良事業に励んで参りましたが、昭和四十六年度末に至り、当初一七名居た従業員は、それぞれ、バス各営業所、本社、観光会社へと配置転換され、残されたのは六一名となりましたが、この

方々の要望により、労働組合の加越線分会長を受けざるを得なくなり、加越線廃

止反対の先頭に立たざるを得なくなりました。

昭和四十七年に入り、加越線廃線問題が深刻化すると、高瀬神社駅舎の放火焼失事件等、従業員の方々の第二の職場作りと夜も寝られない日が続きました。

の話でした。
昭和四十五年九月加越能鉄道は県や関係市町村に対し、正式に昭和四十六年三月を以て加越線を廃止すると通知してきました。私が一番心配したのは、家や職場、地域や利用者の皆様との話合が不十分

私は、当時の労働組合、加越線分会長の職責上、富山地鉄に三日と空けず呼出され、廃止に賛成するよう責められました。終盤には富山市内某所に監禁状態にされ、遂に「一人の首切も行わない」事を条件に了解しました。

時代の流れや経営者の考え方の変化により加越線は廃線ということになりましたが、その本当の理由は、佐伯宗義

社長の立山開発実現という構想による経費集約が最大の理由でありました。立山開発は成功することになりますが、このことにより富山県呉西地区の開発が犠牲になったこと

も現実であります。将来の郷土発展を夢見て苦難を乗り越え、尊い田畑を整地され、鉄道を設置された人達に、申し訳ないことになってしまいました。現在の交通網衰退を招いた事は痛恨の極みでありま

す。当時存続に向けて努力したことを少しでもご理解戴き、真実を後世に伝えたいという思いで、最後にこれを書かせて戴きました。(完)

※このコーナーは氏子古老のお話を聞いて記録しています。岩倉善三氏は昭和五年のお生まれで今年数え八十七歳です。更なるご長寿をお祈り申し上げます。



高瀬神社駅看板

七夕祭・技芸上達祈願祭のご案内

日時 八月七日（日）午後三時より

八月七日に「七夕祭」を行います。織姫さまの裁縫上手にあやかり、習い事が上達するよう祈願する「技芸上達祈願祭」を行います。ご家族お揃いで是非お参り下さい。

なお、七月十三日（水）から八月七日（日）まで御本殿前にて短冊を用意してありますので、自由に願い事を書いて納めて下さい。

※ご祈祷入口からお入り下さい。



ご案内

七五三詣

- 七歳(女子) 平成二十二年生
- 五歳(男子) 平成二十四年生
- 三歳(男女) 平成二十六年生

元服祝(男子)

十五歳(平成十四年生)

髪上祝(女子)

十三歳(平成十六年生)

ご祈禱

家内安全・交通安全・初宮詣・厄除・人生儀礼など「ご祈禱」は毎日午前九時から午後四時半まで随時受け付けております。祭典・結婚式等で御奉仕できない時間帯もございますので、事前に社務所までお問い合わせ下さい。電話〇七六三(八二)〇九三二

辞令

長谷川 宏幸

欄宜を命ずる

平成二十八年六月一日

戌の日(安産祈願)

7月	3・15・27日
8月	8・20日
9月	1・13・25日
10月	7・19・31日
11月	12・24日
12月	18・30日

腹帯のお祓いも行いますのでご持参下さい。

編集後記

平成十六年一月に創刊号を発売し、十二年の月日を経て、今回で五十号を迎えました。こうして五十号が発刊出来ましたのも、偏に皆様方のご厚情によるものと、感謝の気持ちで一杯です。先述したとおり、当神社の宝物殿が開館致しました。お参りの際は、是非お立ち寄り下さい。

社報バックナンバー

当神社ホームページでご覧頂けます。

〔表紙写真〕 宝物殿

玉砂利を踏みしめる音、川のせせらぎ、雅楽の調べが
 厳かな雰囲気を作り上げる ～参進の儀～



巫女の先導による～参進の儀～

お二人の幸せにむかって、参進から結婚式がはじまります。

縁結びの神様に誓う
 伝統の結婚式を挙げていただく、
 一生に一度の日だからこそ、
 一日一組のカップルの為だけに、
 このバンケットは生まれました。



一日一組限定の

おもてなしバンケットホール

このバンケットホールでのご結婚披露宴のご予約を承っております。
 お気軽にお問い合わせ、ご相談いただけますよう、お待ち申し上げます。

只今
 冬・春の婚礼
 ご予約
 受付中

あなたの人生に、神社がある。越中一宮高瀬神社

〒932-0252 富山県南砺市高瀬291
 ご予約はTEL0763-82-1131

高瀬神社 🔍 検索

発行日 平成二十八年七月一日
 発行所 越中一宮 高瀬神社社務所
 〒九三二〇二五二 富山県南砺市高瀬二九一
 TEL 〇七六三 八二一〇九三三
 FAX 〇七六三 八二二三〇四
 編集人 魚岸一弥
 印刷所 牧印刷株式会社